SPAC「桜の園」を観劇して

影山千遥

11月28日（日）にSPAC（静岡県舞台芸術センター）でアントン・チェーホフ作、ダニエル・ジャンヌトー演出の「桜の園」を観劇した。

まず、SPACのロビーに入ると過去の上演作品の舞台写真が飾られていた。ギリシア悲劇である「オイディプス」から現代の有名戯曲である「ガラスの動物園」に至るまで、名作の戯曲がこのSPACで上演されているようであった。

シアター内は舞台との距離が近く、後方の座席でも役者の顔をはっきりと見ることが出来た。舞台上の美術は、リアリズム的な現代演劇とは違い、舞台上は毛皮のようなラグの上に金属製のイスや本棚に見立てた金属製の枠、ベンチなどが必要に応じて舞台上に登場する。舞台は舞台中部くらいが平台一台分ほど高くなっており、低い舞台前方には、（おそらくプロジェクターで）フランス語の日本語字幕が映し出されており、テレビ字幕のようにフランス語のセリフを理解することができた。舞台後方は、前方と同じく一段下がっていたが、演技スペースとして使われていた。

作品は、チェーホフの作品に言われる“リアリズム演劇”とは離れ、舞台美術は抽象的で衣装も現代の普段着のような感じであり、登場人物の性格などをうまく反映させていると思った。俳優たちの演技は、チェーホフの言い回しを自然に演じているように感じた。

帝政ロシアの終焉を感じさせる「桜の園」をフランス語と日本語の二言語で上演することは、異国の体制の変化の様子であるが、新しい時代への適応という普遍的に必要なことを観客に求めているように感じた。